



ロールシャッハ論文集にみられる象徴解釈について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川原, 稔久 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005279

ロールシャッハ論文集にみられる象徴解釈について

Zur Symbolik-Deutung im Ausgewählte Aufsätze von Rorschach

川原 稔 久

2. はじめに—目的と問題

著者は心の本質を実現しようとする心理療法において言葉以前のイメージの役割を重視している。その際に心の本質である逆説的な動きを実現するためにはイメージに働く論理に逆説的な実現を見通すことが重要である一方で、イメージの形成や受容、そして理解にはイメージの基盤や母胎といった次元を重視する必要があると考えている。このイメージの基盤や母胎と考えられるものの一つとして身体性が挙げられるのではないかと、筆者は考えている。つまりイメージを構成するのは感覚や知覚であり、その感官の諸感覚を受容しそれを知覚へと変換する場が身体であることから、イメージにとって身体感覚・身体知覚を中心に諸感覚を知覚に統合するような身体性が重要であると考えている。

その観点から筆者(川原 2005)は、H. Rorschach が知覚判断実験として創始したロールシャッハ法の解釈原理には運動感覚や接触感覚が基盤にあるので、そうした彼の着想が学位請求論文「反射幻覚とその類似現象について」においてその萌芽を見いだすことができるという指摘(H. Ellenberger 1986/1965, K. W. Bash 1986/1965)に関心があり、一つの知覚が契機となって別の知覚が動きの類似性を手がかりに誘発されるという反射幻覚現象に注目してきた。

とりわけ視覚刺激から運動感覚が誘発され、逆に運動感覚から視覚像が誘発される現象にH. Rorschachは注目している。その関心のなかで筆者(川原 2015)は、彼が学位請求論文と同時に発表した論文「反射幻覚と象徴」(H. Rorschach 1912)を紹介し、象徴の定義と解釈が曖昧なままであることを指摘した。

そこで本論文ではH. Rorschachの論文集から彼によるいくつかの小論を紹介し、H. Rorschachの象徴解釈について検討する。そのためにまず次節ではK. W. Bashが編集したロールシャッハ論文集(Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber.)の構成概要を紹介し、本論で取り上げる小論を位置づけた。

2. ロールシャッハ論文集について

ロールシャッハ論文集の巻頭にある編者K. W. Bashの緒言と巻末にある文献表を見ると、H. Rorschachに関わる文書の概要とそのなかでの当時1960年代のロールシャッハ論文集の位置づけがおおよそのところ把握できる。なお、H. Rorschachの遺稿や彼に関わる文書・文献およびロールシャッハ法関連文献の保存および収集に関わる、現代の博物館およびアーカイブスについては、国際学会会報等(Exner, J. E. 2005, 中村 1999)の情報を参照されたい。

2-1. ロールシャッハ論文集の文献表について

H. Rorschachに関わる文書はおおよそ大別すると、H. Rorschachによって公刊された学術的な文書・公刊されていない彼の文書・彼が収集した資料・彼の手紙等私的な文書・彼を追悼した文書・彼との手紙・ロールシャッハ法関連文献などとなる。編者Bashによる1960年代当時の文献表(Rorschach, H. 1965, 350-361)の分類では、大きく三つに分けて(1) H. Rorschachによる文書、(2) 彼についての文書、(3) その他の文書、となっている。それが以下のようにさらに細分化されている。

(1) H. Rorschachによる文書：Rorschach自身が書いたものとして今のところ確定しうる全てを含んでいて、公表されたあるいは公表が決められていた学術的内容の文書(1.1)。

1.1.1 出版された学術論文および著書が『精神診断学』も含めて21編。

1.1.2 いわゆる《読書によって得た断片的知識》—Rorschach自身によって書かれたものではないが、彼によって見出されて彼の民俗学的で精神分析的な関心ゆえに引かれたもの4編。

1.1.3 書評と雑誌論文の評論。主に精神分析中央誌(*Zentralblatt für Psychoanalyse*)に掲載された29編。

1.2 学術でない内容の文書で公表されたものあるいは公表へ決められたものであるが、緒言にもあるように周辺の関係者への多くの手紙等は『精神診断学』前後の彼の思考をふんだんに含んでおり公刊が強く期待されるが、所有者の許可の法律的な問題があり未掲載

である。

1.3 Rorschach によるオリジナルの記録とテストに関する論文。スイス心理学会ロールシャッハ委員会監督の Bern 市および大学付属図書館でのアーカイブスで Rorschach, H. の原稿を編集した Schneider, E. による、『精神診断学』への書評と明暗反応の研究と Rorschach, H. 自身の解釈例を提示した論文 3 編。

1.4 手紙：妹 Anna への手紙 2 編と Walter Morgenthaler 氏への手紙 1 編。

1.5 雑録：妹 Anna 宛の手紙（1896 年 7 月 18 日）に添えられたスケッチ画。

(2) 彼についての文書：Hermann Rorschach の人柄と仕事に関する文書。

2.1 ロールシャッハ・テストの先駆者に関する文書も含めた、伝記とテストの歴史の内容の主な文書。Bash による Jung のタイプ論との異動を論じた論文や Ellenberger の有名な伝記、Minkowski や Morgenthaler らの追悼文に加え妹 Anna による思い出や未亡人 Olga による記念講演等 15 編挙げられている。

2.2 ロールシャッハ・テストと Behn-Rorschach テストに関する文書で、これらの技法を用いてなされた研究に関する文書。当時最新のものであろう Bash や、Binder, H., Kuhn, R. らの論文 16 編が挙げられてある。

なお Behn について H. Rorschach は、Bern の Bircher 出版から刊行された《応用精神医学》選集の編者である医学博士 Walter Morgenthaler 氏への手紙（Rorschach, H. 1965, 78-79）のなかで“見習いの医学実習生”と言及し、彼の学位請求論文の出版を強く願っている。また編者 Bash はその脚注で以下のように情報提供している。

“Hans Behn- Eschenburg は彼の成果《形態解釈による心理的な生徒研究》を 1921 年 St. Gallen の出版社 Zollikof で出版し、その後チューリッヒ大学医学部での研究が学位請求論文として受理されていた。同年それは、Rorschach が予見したように、Bircher 出版で出ている。Behn- Eschenburg は 1934 年に亡くなっている。彼によって並行して作られた一連の表は最初 1941 年に付随するテキストとともに Hans Zulliger から《Behn-Rorschach テスト入門》として公刊されている（Hans Huber 出版、Bern）。”

（なお、編者 Bash は 1954 年 Huber 出版で出版されたロールシャッハ法への論文に関する文献目録と E. Bohm のロールシャッハ精神診断学教科書（*Lehrbuch der Rorschach-Psychodiagnostik. 1957, Huber, Bern.*）にある詳細な文献目録の参照を勧めている。）

(3) その他の文書：Ellenberger（1965）が「生涯と仕事」で記載したもののほとんどを含めてこのロールシャッハ論文集の編者と共同作業によって利用された C.G.Jung の著作等 24 編がここに挙げられている。

2-2. Bash による緒言から

文献表のなかから選ばれてロールシャッハ論文集に並べられた資料は、第 1 部伝記の部と第 2 部学術研究の部の二部から構成されている。長いので目次を挙げるわけにはいかないが、第 1 部伝記の部は、Rorschach 自身の手紙以外は関係者の文書である。第 2 部学術の部では I . 学術的著作と II . 書評となっており、とくに前半の学術著作には文献表でも指摘されていたように彼自身の文書ではなく彼が収集した資料も含まれていて、そこから彼の精神分析学ないしは深層心理学的な関心と民俗学的な関心とを見て取ることが可能であることが特徴であろうと思われる。

またその構成が成立した背景事情があるので、編者 Bash の緒言からいくつかのポイントを挙げてみたい。この論文集の原点は Ellenberger, H. が Schaffhausen の州立医療保養施設の指導医であった頃に Münsterlingen (Thurgau) の州立医療保養施設の指導医であった Roland Kuhn と共同して発見・収集した小論文の集成であった。そのなかで最も興味深いのは Rorschach, H. 自身の記載による患者の病歴資料である。Bash (1965a) の緒言から少し長くなるがそのまま引用したい。

“Kuhn 博士は功績ある方法で新たな貢献を提供していて、それは Münsterlingen の医療保養施設にある患者の病歴資料に Rorschach オリジナルの補遺を得ていたことであった。それに関して彼は編者に宛てて次のように書いている。《Hermann Rorschach が Münsterlingen の医療保養施設に働いていた時代からの病歴に彼の手によるたくさんの記載が見つかる。これらの資料に立ち入って編集することは彼の精神医学的な知見と科学的な見解の展開について重要な一瞥を明かすであろう。Rorschach は当時また極めて多数の患者の写真を撮っていてその都度その複写を病歴に添えていた。これらの写真はなお現存し幾分色褪せているが少なくともとても良く保たれている。これらの写真はある程度うまく芸術家風に特徴付けられている。また病歴もまた Rorschach が Münsterlingen で成した学術的な仕事に関して用いたのであると思われる。》そのような病歴の記録も確定されている限り Rorschach 文庫に収められている。少なくとも 12 事例

が反射幻覚 (P.1: [著者の註; 編者 Bash が付した記号で, Rorschach 自身の出版された文書の順番を指す]) に関する Rorschach の著作からの事例に関わっている。Rorschach が出版しているより多くの患者から後に構成されたのは, Rorschach 自身によってではなく取られたロールシャッハテスト・プロトコルである。Münsterlingen からのそのようなプロトコルと Kuhn 博士による所見とをわれわれはその都度当該のオリジナルの著作への補遺として編入してきている。我々の見解ではそれらのプロトコルは価値ある補完で, よりのちの病気経過が十分知られるようになっている幾つかの場合では興味深い診断上の問いを投げかけている。Kuhn 博士は正当にも次のように言及している, Rorschach が仕事をしたすべての医療施設の文庫の基本的展望はおそらくより広い発見へと導くであろう, そして, Münsterlingen の資料でさえおそらく汲み尽くされないであろうと。(Bash 1965a, 12)

また, 先に述べた通り私的な手紙は多くの場合所有者との法律的問題等で当時は刊行にいたっていなかった。さらに, 関係者 Emil Oberholzer 氏の父の遺産のなかから Rorschach, H. の手稿原典が発見されることもありながらやはり法律的問題から公刊が今後に持ち越されている状態であった。

したがって上記のように, 多くの手稿やオリジナルの1次資料が少しずつ共有されつつあるなかで, 不十分な形ではあるがロールシャッハ論文集は成立している。そうした研究は, 諸家が指摘するように, 症例の症状・病像や表現に関する象徴解釈の研究と, それと並行しつつそのなかから派生してきたと思われるスイス地方宗派の宗祖に関する研究, そして以前から手を付けていた知覚判断実験 (ロールシャッハ法) に関する資料の三つに大別できると考えられる。そのなかでまずは検討が必要であると考えられるのは初期の象徴研究ではないかと筆者は考えた。それは宗祖研究と知覚判断実験の解釈についても遠い背景を形成しているのではないかと考えるからである。そこで以下では初期の象徴解釈研究の小編を検討し, 象徴解釈の背景を議論したい。

3. いくつかの小論にみられる象徴の解釈

ここで取り上げる小論は年代順に, (1) “失敗した昇華の一例と名称忘却の場合” (ロールシャッハ, H. 1986/1912a, 69-74), (2) “神経症者の生における時と時間” (Rorschach, H. 1965/1912a, 158-161), (3) “蛇とネクタイの象徴” (Rorschach, H. 1965/1912b, 161),

(4) “もうろう状態での馬泥棒” (ロールシャッハ, H. 1986/1912b, 75-81), (5) “一精神分裂病患者の絵に関する分析的覚書” (ロールシャッハ, H. 1986/1913a, 82-85), (6) “神経症患者における友人の選択について” (ロールシャッハ, H. 1986/1913b, 86-89), (7) “一精神分裂病患者の素描の分析” (ロールシャッハ, H. 1986/1914, 90-97), (8) “ある健忘症治療に役立つ連想実験, 自由連想と催眠” (ロールシャッハ, H. 1986/1917, 98-109), の八編とする。

(1) “失敗した昇華の一例と名称忘却の場合” (ロールシャッハ, H. 1986/1912a, 69-74)

Rorschach, H. はここで猥褻行為のため精神鑑定を受ける20歳男性が分析中に報告した夢を扱っている。夢に出てくる, 頂上が二つに裂けた山のイメージ, 姉を救済するテーマ, 女性と結ばれる場所としての故郷の山の歌, 点線で描かれたMのイメージとそこからの患者の自由連想などから, Rorschach, H. はこれらのイメージが性的願望と近親姦の禁止を象徴すると考察している。また連想中の作曲家の名前 Maria を忘れている現象を, 音楽として性的衝動を昇華することに失敗した現象であると考察している。この忘却の背後に性衝動を措定することで Rorschach, H. は, 性衝動を内包しつつ性衝動を昇華するはずの音楽に関するイメージで作曲家の名前を忘却したという昇華の失敗が生じたことを, Freud が述べたメカニズム, つまり性衝動という抑圧されたものが性衝動の昇華としての音楽という抑圧するものから表れるメカニズムとして理解している。

(2) “神経症者の生における時と時間” (Rorschach, H. 1965/1912a, 158-161)

Rorschach, H. はこの論文で, 子供が母親の乳房に抱えられているときに経験する母親の心臓の拍動が時計や生における時のイメージに結びつき, 時計と心臓と乳房が結び付けられた象徴表現や象徴的な言動が生じていると考察し, そのことを多くの観察が示すとして, 時計とモーターに特別な関心を示した24歳の男性患者の例を挙げている。その例では幼少期より母親の乳房を巡ってアンビヴァレントな感情を経験してきた患者が婦人物の時計を噛み砕くというサディスティックな症状がオーラル・サディズムとして考察されている。さらに成長に伴って生じる性的生活に対する思春期前後のアンビヴァレントな様相をエストニアの童話《トントラ森》を素材として提示している。

反射幻覚現象を通じて, 運動感覚と視覚像とが反映

しあうことに注目していた Rorschach, H. (1912) は、多くの知覚が身体を場に統合されて象徴が生じる場合を指摘していた。また感情コンプレックスによっても象徴が生じる場合も指摘していた。その際には患者の幻覚症状や夢から例証されてきたが、ここではそれに加えて童話が導入されている点が興味深いと思われる。というのも、童話《トントラ森》では、継母から森に逃げた思春期少女エルザが森で人生の秘密に触れ乙女への成長を果たすというイニシエーションのテーマが示されているからである。

(3) “蛇とネクタイの象徴” (Rorschach, H. 1965/1912b, 161)

この資料では、19歳男性患者が医師に渡した絵画が掲載されていて、“ネクタイが Freud の意味で男根象徴を表す”と言及されているだけである。その絵画では左下にいる髭を生やした男性のネクタイが長く伸びてその先端が鎌首を持ち上げた蛇として描かれており、それが向かう右側上方には三つ編み髪を左右のおさげに垂らしたふくよかな胸の女性が描かれている。そして中央には《道標》の文字が書き込まれた道しるべが立っていて、その左右の道標の腕にはそれぞれ上下を指し示す手のようなものが描かれている。Rorschach, H. はこの絵を詳細に分析する記述を行っていないので彼がその象徴性をどの程度まで把握していたのかを定めることはできないが、少なくとも絵画に示された水平軸と垂直軸の2重の対比が象徴性を高めているものと思われる。

(4) “もうろう状態での馬泥棒” (ロールシャッハ, H. 1986/1912b, 75-81)

Rorschach, H. はこの論文で馬を盗んだ34歳男性の精神鑑定作業を詳細に記述しており、“ユング-リクリンによる連想実験”の結果からてんかんと精神薄弱の可能性を否定しつつ、精神分析的探求と催眠は患者の状態から不可能であったとしている。そして連想実験から引き出された陳述に患者のもうろう状態が常に別れた妻を追いかける状況で引き起こされていたことを解明している。精神分析的な探求が不可能だったために“フロイド-ユングの意味におけるコンプレックス”の要因は分析され得なかったとしているが、もうろう状態という変性意識状態について患者が想起した事柄は、潜在的な記憶の混交による新しい観念としての妄想を作り出す無意識的な過程を立証しているとする。

ここでは象徴という表現はされていないが患者の奇

妙な言動が常に別れた妻に出会うためという意味を持っていたことが解明されており、無意識的な過程が妄想観念を形成するという考え方が明確に示されていると思われる。

(5) “一精神分裂病患者の絵に関する分析的覚書” (ロールシャッハ, H. 1986/1913a, 82-85)

この小論で Rorschach, H. は、知的障害を伴う40歳の精神分裂病男性患者の描いた“晩餐”の絵について、患者が加えた絵への修正とそれについての陳述をもとに、象徴的思考の自律性を証明している。連想実験も精神分析もうまくいかなかったが、患者の絵に関する説明が患者の幻覚と妄想の背後にある欲望を明快に説明している。つまり、キリストは患者が結合を望んだ母でありかつ少女であり、ユダは裏切り者である父親であり、常にキリストのそばに仕えるヨハネが患者自身である。そして Rorschach, H. は患者による絵の修正が近親姦コンプレックスと同性愛傾向から解釈できる象徴的な思考の表現であるとしている。

(6) “神経症患者における友人の選択について” (ロールシャッハ, H. 1986/1913b, 86-89)

Rorschach, H. はこの小論で、分析に来た22歳の男性患者の対照的な友人の選択と患者の夢に現れる対照的な両親像から、患者の無意識的な選択を描写している。つまり対照的な友人はそれぞれ父の代理と母の代理であり、現実的な両親から友人への表現の移行には検閲が原因となっているとする。父親を求める気持ちと母親を求める気持ちとその代理である友人の選択となっていて、夢にはその近親姦コンプレックスと同性愛傾向が解釈される。そして父親像の転移を引き受けて分析治療が行われた経過が素描されている。

ここまでで Rorschach, H. の象徴解釈の背景にあった精神分析的な枠組みがかなり明瞭になる経過があると思われる。つまり、言語連想実験と精神分析、催眠などを通じて、夢や絵画、患者の陳述を素材に無意識的な過程を解釈する際に、エディパールなコンプレックスの考え方が前景に出てきていることと、その際に Freud の考え方を枠組みとして採用する傾向がより明瞭になっていると思われる。さらに転移の考え方で治療を実践したことも記述の最後では理解することができる。

(7) “一精神分裂病患者の素描の分析” (ロールシャッハ, H. 1986/1914, 90-97)

Rorschach, H. はこの論文でも両親像の分裂と治療者

への転移を扱うが、44歳の患者は分裂病であり、その分裂したイメージは神経症者と違い、現実の両親といった人間関係に収まらず、患者がより超越した次元で“世界との和合を保つ”ために描いた奇妙な絵に現れている。その絵は管の絵であり、そこに付されている斜線や記号について患者の説明が幾つもの意味を示している。それは太陽や太陽光線であり、多くの対立物を統一し統合する水準器でもあると言う。Rorschach, H. は男根の象徴という軸で解釈しているし、患者も両親像の水準で説明しているが、現実の両親という次元での対立を超えたイメージであると思われる。ここでは言及されないが、Jung, C.G. の分裂病の患者が示した太陽とそこから伸びる管という幻覚的なイメージと極めて類似したものであると思われる。それとの関連についての探求は今後の課題としたい。

また同じ超越的な次元での分裂の問題が宗派的な宗派分裂の問題へと関連付けられている。この問題はRorschach, H. が専心した宗派の問題へと直結する興味深いテーマであるが、ここでは手にあまるため別の機会としたい。

(8) “ある健忘症治療に役立つ連想実験，自由連想と催眠”（ロールシャッハ，H. 1986/1917, 98-109）

この論文ではもうろう状態を繰り返す兵士の精神鑑定経過が詳述されるが、そこで用いられた言語連想，自由連想および催眠による経過が興味深い。言語連想および催眠によっててんかん性のせん妄が判明しているが、自由連想ではそれに引き続いて夢幻様の変性意識状態が生じ、もうろう時の観念とコンプレックスとの関連が検討されていく。そこでRorschach, H. は父親に対する義父の存在の影響を推定するが、十分に分析できる状況ではなかったようである。しかし自由連想という手法がもうろう状態を誘発した事実をもってコンプレックスの影響を強く想定しうるのでとRorschach, H. は主張している。

この論文でもRorschach, H. が言語連想，自由連想を用いた精神分析，そして催眠を順次試みて，無意識的な過程が及ぼす影響を査定し，そこにコンプレックスの要因を同定しようとしていることが分かると思われる。

4. おわりに

ここまでの紹介でRorschach, H. がその象徴の解釈に精神分析的なコンプレックス理論を次第に明確に前景化していたことが看取できると思われる。それは同時に反射幻覚現象で注目した知覚の統合という観点が背

景化した経緯でもあると思われる。それとともに、童話への着目、分裂病の超越的なイメージへの関心、宗派問題への着想が、それら象徴解釈とどのように関連しており、これらの小論の直後に知覚判断実験を完成させるに至った経緯にどのように結びつくのかという問題は今後の機会に検討したい。

文献

- Bash, K. W. (1965a). *Vorwort*. In: Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 9-15.
- Bash, K. W. (1965b). *Nachwort: Tabula undecima seu smragdina*. In: Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 315-349. バッシュ, K. W. (1986). 十一番目の、あるいはエメラルドの書板. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). *ロールシャッハ精神医学研究*. みすず書房, 199-237.
- Ellenberger, H. (1965). *Leben und Werk Hermann Rorschach (1884-1922)*. In: Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 19-69. エレンベルガー, H. (1986). H. ロールシャッハ (1884-1922) の生涯と業績. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木睦夫 (訳) (1986). *ロールシャッハ精神医学研究*. みすず書房, 5-35.
- Exner, J. E. (2005). *ロールシャッハ・アーカイブスと博物館*. *国際ロールシャッハ学会会報*15, 6-7.
- 川原稔久 (2005). *心理臨床における身体症状と象徴表現*. *佛教大学通信教育部*.
- 川原稔久 (2015). H. Rorschachの“反射幻覚と象徴”について. *大阪府立大学大学院人間社会学研究科心理臨床センター紀要*, 第8号, 3-8.
- 中村紀子 (1999). *スイス, ベルンに「ロールシャッハ・アーカイブス」を訪ねて*. *包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌*, 3(1), 87-90.
- Rorschach, H. (1912). *Reflexhalluzinationen und Symbolik*. *Zentralblatt für Psychoanalyse* 3, 121-128.
- Rorschach, H. (1965/1912a). *Zum Thema: Uhr und Zeit im Leben der Neurotiker*. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. 158-161
- Rorschach, H. (1965/1912b). *Zur Symbolik der Schlange und der Krawatte*. *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammengestellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans

Huber. 161

- Rorschach, H. (1965). *Ausgewählte Aufsätze*. Zusammenge- stellt und herausgegeben von Bash, K. W., Verlags Hans Huber. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木陸夫 (訳) (1986). ロールシャッハ精神医学研究. みすず書房.
- ロールシャッハ, H. (1986/1912a). 失敗した昇華の一 例と名称忘却の場合. バッシュ, K. W. (編) 空井 健三・鈴木陸夫 (訳) (1986). ロールシャッハ精 神医学研究. みすず書房, 69-74.
- ロールシャッハ, H. (1986/1912b). もうろう状態 で の馬泥棒. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木 陸夫 (訳) (1986). ロールシャッハ精神医学研究. みすず書房, 75-81.
- ロールシャッハ, H. (1986/1913a). 一精神分裂病患者 の絵に関する分析的覚書. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木陸夫 (訳) (1986). ロールシャッ ハ精神医学研究. みすず書房, 82-85.
- ロールシャッハ, H. (1986/1913b). 神経症患者におけ る友人の選択について. バッシュ, K. W. (編) 空 井健三・鈴木陸夫 (訳) (1986). ロールシャッハ 精神医学研究. みすず書房, 86-89.
- ロールシャッハ, H. (1986/1914). 一精神分裂病患者 の素描の分析. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・ 鈴木陸夫 (訳) (1986). ロールシャッハ精神医学 研究. みすず書房, 90-97.
- ロールシャッハ, H. (1986/1917). ある健忘症治療に 役立つ連想実験, 自由連想と催眠. バッシュ, K. W. (編) 空井健三・鈴木陸夫 (訳) (1986). ロー ルシャッハ精神医学研究. みすず書房, 98-109.